

中国地域研究のための基本文献

[現代中国編]

<資料・統計>

○21世紀中国総研編『[中国情報ハンドブック](#)』各年版、蒼蒼社（最新刊は2013年）。

当年の主要な問題について解題を行う「特集」部分と、基本統計データの図表部分から構成される。2013年の特集は、習近平・李克強体制の課題、共産党青年団の幹部、党と軍のジレンマ、米中関係と尖閣問題を取り上げている。基本数値データは、中国の世界ランキング、地理・行政と人口、政治経済、地方経済、対外経済、日中経済関係に分類されており、出版社のウェブサイトからも一部を見ることができる。

同じ出版社による『[中国情報源\[2013-2014年\]](#)』（21世紀中国総研編）も、変化の激しい中国情報の出所を調べるのに便利。この出版社は日系企業の対中進出や環境問題などテーマ別の中国情報を継続的に提供している。=>『[中国進出企業一覧](#)』、『[中国環境ハンドブック](#)』

★いずれも、図書館所蔵分は、一部の年のみ。

○中国国家統計局編『[中国統計年鑑](#)』各年版、中国統計出版社。

総合的な統計データを調べる際に、基本中の基本となる文献。英語と中国語の2言語で表記されている。中国国家統計局のウェブサイトにも、2年前までのデータは無料で公開中。最新の公式統計については、同じサイトの「統計公報」を確認すると良い。テーマ別の統計は、各省庁のウェブサイトにも年次統計報告が記載されていることもある。

<一般・総合>

○梶谷懐『[「壁と卵」の現代中国論](#)』人文書院、2011年。

現在、中国が抱える問題に対して、普遍的な観点から「なぜそうなるのか？」を追求したエッセイ集。日常生活で触れる中国のイメージを切り口にしており、平易な文章で読みやすい。

○天児慧『[中華人民共和国史 新版](#)』岩波新書、2013年。

中国革命の前夜から現在までの紆余曲折を、新書の紙幅で手際よく整理した一冊。国内の論理に留まらず国際関係の影響も論じており、変化の諸相を多面的に理解できる。

○叢書『[中国の問題群](#)』全12冊（2009年～）、岩波書店。

分野ごとに約 100 年の推移を整理し、歴史的意味づけを踏まえて、「21 世紀の中国とどう付き合うのか」を問いかけるシリーズ。1 巻：党と国家、2 巻：「中華民族」の虚実、3 巻：法とはなにか、4 巻：中央と地方、5 巻：中国企業のルネサンス、7 巻：農村から都市へ、8 巻：教育は不平等を克服できるか、9 巻：大河失調-直面する環境リスク、10 巻：高まる生活リスク、11 巻：軍隊と安全保障、12 巻グローバル中国への道程-外交 150 年。2、4、11 巻を除く 9 冊まで刊行済み（2013 年 9 月現在）。

<政治・外交>

○浅野亮、川井悟編『[近現代中国政治史](#)』ミネルヴァ書房、2012 年。

清朝崩壊から胡錦濤・温家宝体制まで、180 年余のタイムスパンをカバーする本格的な概説書。政治の通史に加えて、外交と思想への考察も示される。

○毛里和子『[現代中国政治-グローバル・パワーの肖像 第3版](#)』名古屋大学出版会、2012 年。

名実ともに大国化した現代中国の政治を、3 部構成で分析した教科書。第 1 部は共産党政権の 60 年を、第 2 部は「国家・党・軍隊」の三位一体の関係を、第 3 部は直近の支配パターンを論じており、毛沢東時代とポスト鄧小平時代の変化が分かる。

○遠藤誉『[チャイナ・ナイン 中国を動かす 9 人の男たち](#)』朝日新聞出版、2012 年。

中国独特の政治制度をリアルに理解するための一冊。現在進行形の指導者層の権力闘争を詳細に描き出すことで、制度の機能を浮き彫りにする。

<経済>

○林毅夫（劉徳強訳）『[北京大学 中国経済講義](#)』東洋経済新報社、2012 年。

※原著 *Demystifying the Chinese Economy* と《中国経済專題》は 2008 年刊行

中国の急激な高度経済成長の過程を大学生向けに解説した概説書。政治・文化にも目配りを利かせ、中国の比較優位の所在を明らかにしながら、発展途上国にとって既存の経済成長の理論がもたらす意味を説明する。著者は世界銀行の元チーフエコノミスト。

○加藤弘之、上原一慶編『[現代中国経済論](#)』ミネルヴァ書房、2011 年。

中国経済の構造をトピック別に解説した教科書。経済成長のメカニズムと並行して、制約要因にも多くの紙幅が割かれている。また対外経済の部では、華人圏および途上国との貿易投資にも光を当てているのが特徴。なお編者の一人である加藤弘之は、近著『[21 世紀の中国経済 国家資本主義の光と影](#)』朝日新聞社出版、2013 年（渡邊真理子、大橋英雄との

共著)で「国家資本主義」の観念を用いて中国経済を分析しているので、本書の概説に飽き足りない場合はそちらも読むとよい。

○ロナルド・コース、王寧(栗原百代訳)『[中国共産党と資本主義](#)』日経BP社、2013年。

中国経済が短期間に「資本主義」へと転換したのは、国家主導と草の根の二つの改革が存在した。本書はそのプロセスを、豊富なエピソードを交えて、一般読者に分かりやすく紹介している。

○中兼和津次『[開発経済学と現代中国](#)』名古屋大学出版会、2012年。

中国経済を開発経済学の理論的枠組で分析した専門書。開発経済学の教科書に準じた構成になっており、ルイス・モデル、雁行形態論、分配と貧困、人的資本と教育、環境クズネッツ曲線、開発独裁といった概念を用いるので、開発論に興味のある人向け。

<社会>

○若林敬子『[中国の人口問題と社会的現実](#)』ミネルヴァ書房、2005年。

「一人っ子政策」を軸にして、食糧、環境、労働力、高齢化、少数民族を縦横無尽に論じた大作。豊富なデータの裏付けが掲載されており、索引をうまく使えば人口政策の百科事典としても役に立つ。同じ著者編の『[中国 人口問題のいま](#)』(ミネルヴァ書房、2006年)では、中国の人口学者たちの研究を丹念に翻訳、紹介している。

○阿古智子『[貧者を喰らう国](#)』、新潮社、2009年。

中国社会の格差問題を、貧困農村を舞台に圧倒的なフィールドワークに基づいて描き出している。刺激的なタイトルだが、中国への反感を煽る内容ではなく、地道な調査と分析である。同じテーマでは、王文亮の『[格差大国 中国](#)』(旬報社、2009年)と園田茂人『[不平等国家 中国---自己否定した社会主義のゆくえ](#)』(中公新書、2008年)も一読の価値がある。

○李妍焱『[中国の市民社会—動き出す草の根NGO](#)』岩波新書、2012年。

経済成長は豊かさとともに不平等を表面化させた。新たなリスク社会を生きるため、草の根レベルでは一般住民が手弁当でNGOを組織している。本書は、中国社会の自律的な動きを一般向けに紹介するとともに、政府と市民の複雑な関係を浮かび上がらせている。

(2013年9月 文責:澤田ゆかり)

[歴史・文化編]

<事典・工具>

- 『[東洋歴史大辞典](#)』(全9巻)、平凡社、1937-39年。

最初の本格的な東洋史事典。1986年に臨川書店より縮刷復刊(全3巻)が刊行されている。

- 『[アジア歴史事典](#)』(全10巻)、平凡社、1959-1962年。

項目によってはやや内容が古いものもあるが、基本的知識を得るには最適な事典。1984年に[新装復刻版](#)が刊行されている。第10巻「アジア歴史事典索引」は「首字画順一覧」「首字音順一覧」「漢字索引」「カナ索引」「ローマ字索引」「系図索引」からなる。

- 諸橋轍次著『[大漢和辞典](#)』大修館書店、1960年初版。

★図書館所蔵分の最新は、[修訂第2版\(1989-1990年\)](#)と[補巻2冊\(1990-2000年\)](#)

漢和辞典であるが、古典にもとづく表現の意味と出典とを正確に知るために有効。歴史や文化関係の資料はもちろん、現代中国の文献を読む際にも勧める。初版以降、版を重ね、現在では当初の13巻に新たに「語意索引」「補巻」を加えた全15巻からなる。

- 松田寿男、森鹿三編『[アジア歴史地図](#)』(『アジア歴史事典』新装復刊版別巻)、平凡社、1984年。

カラー図版。巻末の索引は「首字画順一覧」「首字音順一覧」「漢字索引」「カナ索引」からなる。

- 京大東洋史辞典編纂会編『[新編東洋史辞典](#)』東京創元社、1980年。

ハンディタイプで使いやすく信頼できる辞典。

- 『[中国歴史大辞典](#)』(全13巻)、上海：上海辞書出版社、1983-2000年。

1911年までを対象とし、大まかな時代別に編集されている。それとは別に、「史学史」「思想史」「民族史」「科技史」「歴史地理」といった分野別の巻がある。索引の排列は筆画順。巻末の付録として「中国历代戸籍、人口、垦田总数表」「中国历代度量衡演变表」など5種類のほか、「中国历史地图」、項目第1字目の「四角号码索引」も収録。

- 潘樹広編著；松岡栄志編訳『[中国学レファレンス事典](#)』、凱風社、1988年。

※原著『書海求知』、上海：知識出版社、1984年。

全体を「毛沢東著作／哲学／美学」、「政治／法律／経済」、「文化／教育」、「言語／文字」、「文学」、「音楽／舞踊／雑技／曲芸」、「演劇／映画」、「美術／書法」、「歴史」、「文

物／考古」、「科学技術史」、「地理」の12分野に分け、その文献検索法を113の「質問」「答え」「アドバイス」で紹介。辞書・史料の該当部分の画像も多く例示されている。原書は図書館司書のために編まれたものだが、学部学生や研究者が専門外の事項を調査する時にも有効。

○溝口雄三、丸山松幸、池田知久編『[中国思想文化事典](#)』東京大学出版会、2001年。

中国思想の基本的な概念を66項目に分け、その歴史的生成と意味内容の変遷について解説している。「宇宙・人倫」、「政治・社会」、「宗教・民俗」、「学問」、「芸術」、「科学」の6分野から構成。

<入門・概説書>

○溝口雄三著『[方法としての中国](#)』東京大学出版会、1989年。

戦後の日本における中国研究は西欧の尺度で捉えたものであったと批判し、中国・西欧それぞれが独自性をもって存在する多元的世界の構成要素として中国を捉えることを提唱したことで大きな反響を呼んだ。中国認識、中国研究の方法論を考えるうえで必読の書とされる。

○島田虔次ほか編『[アジア歴史研究入門](#)』(全6巻)、同朋舎、1983-87年。

中国Ⅰ(第1巻)、中国Ⅱ・朝鮮(第2巻)、中国Ⅲ(第3巻)、内陸アジア・西アジア(第4巻)、南アジア・東南アジア・世界史とアジア(第5巻)、総目次・総索引(別巻)から構成。中国については、時代順に「研究史」「資料解説」を整理したうえで、「目録学」「歴史地理学」「考古学」「思想史」「科学技術史」「風俗史」「女性史」といった分野別の研究案内も収録。また、別巻として「総目次・総索引」が充実している。

○中国史学の基本問題シリーズ(各編集委員会編、汲古書院)。

- | | |
|--|-------|
| (1)『 殷周秦漢時代史の基本問題 』 | 2001年 |
| (2)『 魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題 』 | 1997年 |
| (3)『 宋元時代史の基本問題 』 | 1996年 |
| (4)『 明清時代史の基本問題 』 | 1997年 |

各時代の歴史上重要かつ鍵となる問題について、分担者がその問題を研究する視点と意味、研究史と研究状況、関係史資料について解説を加えたものであり、それぞれの時代を知るための基本となる書である。

○礪波護、岸本美緒、杉山正明編『[中国歴史研究入門](#)』名古屋大学出版会、2006年。

2部構成になっており、第Ⅰ部では時代順に「研究の視点」「研究の展開」「史資料の解

説」について、第Ⅱ部では史資料を読むための「目録学」「金石学・考古学」「地理学」といった分野別に解説。巻末の「付録」として、各章の「文献一覧」と全体の「執筆者一覧」を収録。

○日外アソシエーツ株式会社編集『[中国を知る本](#)』(全3巻)、日外アソシエーツ、2008年。

「[政治・経済：13億人の今](#)」(第1巻)、「[歴史：4000年の繁栄と興亡](#)」(第2巻)、「[文化：四書五経から美術・音楽まで](#)」(第3巻)からなる。

○並木頼壽、杉山文彦編著『[中国の歴史を知るための60章](#)』(エリア・スタディーズ87)、明石書店、2011年。

「日本にとっての中国」という問題意識を中心軸として、「歴史と文化」「明・清伝統中国」「近・現代の中国」「日本と中国」の4章立てで構成。東アジアのなかの中国と日本、という広い視点から中国史を捉えることを企図し、各分野の研究者が執筆している。巻末には「参考文献」のほか「中国の歴史を知るためのブックガイド」も収録。

<通史>

○礪波護、森正夫、加藤祐三著『[中国](#)』(上下巻、[地域からの世界史2-3](#))、朝日新聞社、1992年。

地域における縦の時代展開をたどるとともに、世界史的な観点から「世紀ごとの時刻割り」で横に切断して叙述する手法を試みたシリーズの一環。ヨーロッパの大航海時代の波が押し寄せた15世紀末を境として2巻に分かれている。各巻末には「年表」「文献案内」「索引(人名・事項)」を収録。「文献案内」では「入門書」「一般書」「専門書」の見分けがつくよう記号が付されている。

○J・K・フェアバンク著;大谷敏夫、太田秀夫訳『[中国の歴史：古代から現代まで](#)』(Minerva21世紀ライブラリー②)、ミネルヴァ書房、1996年。

※原著 *CHINA: A New History*, Harvard University Press, 1992.

1970年代以降のアメリカにおける対中イメージ、特に人権や民主主義といった価値観で中国を測ることへ疑問を呈し、独断と偏見を排して中国の歴史を分析し、実情を把握することを試みている。当時のアメリカにおける中国史研究成果が網羅されており、当時の動向がよく分かる。

○尾形勇、岸本美緒編『[中国史 新版](#)』(新版世界各国史3)、山川出版社、1998年。

前身の鈴木俊編『[中国史](#)』(世界各国史、山川出版社、1954年)、『[中国史\(新版\)](#)』(同、1964年)から、編者と執筆陣を一新。はじめに「中国とは何か」と問うたうえで、時代

順に解説されている。巻末に「索引」「年表」「参考文献」「王朝系図」を収録。

○日比野丈夫、礪波護監修『[中国文明の歴史](#)』(全12巻、中公文庫1-12)、中央公論新社、2001年。

宮崎市定らが監修した『東洋の歴史』(全13巻、人物往来社、1966-67年)の第13巻を省いたかたちで文庫化。考古学と現代史の部分には後の研究成果が追加されている。

○松丸道雄ほか編『[中国史](#)』(全5巻、世界歴史体系)、山川出版社、2002年。

各巻末に「人名索引」「地名索引」「事項索引(作品名も含む)」や詳細な年表(1800-2001年)のほか、中国史研究のための参考文献案内を収録。また、台湾・香港・マカオについては独立した章立てで扱っている。

○礪波護ほか編『[中国の歴史](#)』(全12巻)、講談社、2004-05年。

旧版『中国の歴史』(全10巻、講談社、1974-75年)を受け継ぐ。時代別に各編者が新たな切り口で解説している。幅広い読者を対象としており読みやすい。

○課程教材研究所、総合文科課程教材研究開発中心編著；並木頼寿監訳、大澤肇ほか訳『[中国の歴史と社会：中国中学校新設歴史教科書](#)』(世界の教科書シリーズ26)、明石書店、2009年。

2000年から中国で行われた教育改革の一環として、一部の初級中学(日本の中学校にあたる)で始まった新学科『歴史と社会』の教科書(2003-05年出版)の歴史部分をまとめて翻訳したもの。なお、それ以前の歴史科目の教科書として、2001年に出版された教科書の邦訳版『[入門中国の歴史：中国中学校歴史教科書](#)』(大里浩秋ほか訳；小島晋治、並木頼寿監訳、明石書店、2001年)もある。中国の歴史教育の状況が分かり、歴史認識を理解する手助けとなる。

< 専論・研究書 >

○宮崎市定『[科挙](#)』中公新書、中央公論社、1963年。

とくに宋代以降の中国の統治システムと社会システムを理解するためには科挙について理解しておかなければならない。科挙についての書は少なくないが、古典ともいえるべき本書をまず読むことを勧める。

○滋賀秀三著『[中国家族法の原理](#)』創文社、1967年。

中国の基層社会を形成する宗族・家族とはどのような仕組みをもち機能しているかを、中国の歴史資料を用いて、従来の西洋社会を基準とした視点とは異なった方法で分析し

た研究であり、日本はもとより中国、欧米における中国の宗族・家族研究の教科書ともいべき書である。

★図書館では、[第2版（1975年刊）](#)を所蔵

○田中正俊著『[中国近代経済史研究序説](#)』東京大学出版会、1973年。

中国近代を世界経済の構造から解き明かした最初の研究といってよい。以後の世界から中国の近代経済を分析した諸研究の嚆矢となった。

○坂野正高著『[近代中国政治外交史](#)』東京大学出版会、1973年。

中国近代政治史を詳細に論じた書。専門書ではあるが、近代史を学ぶものにとっては優れた入門書でもある。

○滋賀秀三著『[清代中国の法と裁判](#)』創文社、1984年。

前近代中国において裁判はどのようにおこなわれたか、裁判のよりどころとしての法源についての研究書である。専門的な書であるが、実際の訴訟に言及しており読み物としても興味深い。また、現代の中国人の法に対する意識の底にどのようなものが受け継がれてきているのかを理解するためにも有効である。なお、続編として『[続・清代中国の法と裁判](#)』（創文社、2009年）がある。

○余英時著・森紀子訳『[中国近世の宗教倫理と商人精神](#)』平凡社、1991年。

近年における中国の経済発展の淵源を求める意味もあり、前近代における商業研究が盛んに行われるようになった。本書は職業倫理の問題について、中国では倫理的人格への努力がなされず資本主義の精神を出現させることは不可能であったとするマックス=ウェーバーの論を批判したものであり、世界史の枠組みを考えるうえからも興味深い書である。

(2013年9月 文責：臼井佐知子)